

令和 7 年度（2025 年度）

教職課程

自己点検・評価報告書

四天王寺大学

令和 8 年 6 月

四天王寺大学 教職課程認定学部・学科（免許校種・教科）一覧

- ・文学部 (日本学科 (中・高 国語、高 書道)、
国際コミュニケーション学科 (中・高 英語))
- ・社会学部 (社会学科 (中 社会、高 地歴、高 公民)、
人間福祉学科 (高 公民、高 福祉))
- ・人文社会学部 (日本学科 (中・高 国語、高 国語、高 書道)、
国際キャリア学科 (中・高 英語)、
社会学科 (中 社会、高 地歴、高 公民)、
人間福祉学科 (高 公民、高 福祉))
- ・教育学部 (教育学科 (幼、小、中 国語、中・高 英語、中 社会、
中・高 数学、中・高 理科、特支、養護))
※中学国語と中学社会は令和6年度入学生以降のみが対象
- ・看護学部 (看護学科 (養護))

大学としての全体評価

四天王寺大学は、聖徳太子が推古元年（西暦 593 年）に四天王寺を創建し、敬田院を設立された精神「帰依渴仰 断悪修善 速証無上 大菩提処」を建学の精神とし、聖徳太子が制定された十七条憲法に準拠して学園訓を制定している。本学創設以来、十七条憲法の第一条「和を以て貴しとなす」に象徴される「和の精神」により道德観・倫理観を涵養し、自己を磨く教育を実践してきた。利他の心を持ち、磨き上げた自己の知識・技能をもって人々に寄り添える人材を育成することは本学の使命である。本学の教員養成の理念は建学の精神を踏まえて仏教精神を基盤においた小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教諭、養護教諭を養成することにある。

この養成する「教員像」は、学内の全学的な会議体（教育研究評議会、大学運営会議）から委員会（教員養成カリキュラム委員会、教職支援委員会など）や教職課程を設置する学部・学科、教職教育推進センター等を通じて教職員間で共有化されている。これを通して教職課程カリキュラムの編成、実施とその評価、改善を通して本学の教職課程教育の質の向上に努めている。

また、教職課程の実際の運営として、教職教育推進センターを中心に、学部・学科、教務部、キャリアセンター等の関係部署が連携する体制を整備しており、教職課程カリキュラムの運用はもとより、履修指導、教育実習、教員採用試験対策などを一体的に実施している。

本学の教職課程教育は、公立学校教員採用試験での高い採用実績にも端的に見られるように、一定の高い成果を上げることができている。今後は、今回の教職課程自己点検・評価活動を通じて明らかになった課題の改善、解消に向けた努力を不断に行っていくことによって、本学の教職課程教育の質のさらなる向上を図っていく。

四天王寺大学

学長 須原 祥二

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	4
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	4
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	13
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	23
III	総合評価（全体を通じた自己評価）	32
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	34

I 教職課程の現況及び特色

1 教職課程の現況大学名：四天王寺大学

(1) 学部名：文学部（日本文学科・国際コミュニケーション学科）

社会学部（社会学科・人間福祉学科）

人文社会学部（日本文学科・国際キャリア学科・社会学科・人間福祉学科）

教育学部（教育学科）

看護学部（看護学科）

(2) 所在地：大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

(3) 教職課程の履修者数及び教員数

① 教職課程の履修者数

令和7年度（令和8年3月1日現在）

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
文	日本	国語	中学1種	22	29	－	－	51
			高校1種	23	28	－	－	51
		書道	高校1種	8	8	－	－	16
	国際コミュニケーション	英語	中学1種	1	9	－	－	10
			高校1種	3	9	－	－	12
社会	社会	社会	中学1種	38	36	－	－	74
		地理歴史	高校1種	36	18	－	－	54
		公民	高校1種	34	14	－	－	48
	人間福祉	公民	高校1種	0	1	2	－	3
		福祉	高校1種	0	1	2	－	3
人文社会	日本	国語	中学1種	－	－	15	20	35
		国語	高校1種	－	－	15	20	35
		書道	高校1種	－	－	3	8	11
	国際キャリア	英語	中学1種	－	－	2	0	2
		英語	高校1種	－	－	2	0	2
	社会	社会	中学1種	－	－	16	14	30
		地理歴史	高校1種	－	－	10	15	25
		公民	高校1種	－	－	8	13	21
	人間福祉	地理歴史	高校1種	－	－	0	0	0
		公民	高校1種	－	－	2	0	2
		福祉	高校1種	－	－	2	0	2
教育	教育	－	幼稚園1種	70	73	64	87	294
		－	小学校1種	252	224	186	220	882
		国語	中学1種	9	10	－	－	19
		英語	中学1種	16	29	19	40	104
			高校1種	13	29	28	36	106
		数学	中学1種	60	59	34	29	182

教育	教育		高校 1 種	44	59	32	26	161
		社会	中学 1 種	12	8	－	－	20
		理科	中学 1 種	33	24	－	－	57
			高校 1 種	30	24	－	－	54
		－	特支 1 種 (知・肢・病)	25	31	21	43	120
		－	養護 1 種	21	26	30	28	105
看護	看護	－	養護 1 種	－	－	3	3	6

※各学科 1～3 年次生は希望免許登録者数、4 年次生は一括申請者数

② 教員数

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	44	22	28	3	0
備考：					

(1) 卒業者の現況

令和 6 年度卒業生（令和 7 年 5 月 1 日現在）

学部	学科	就 職 先 状 況											
		認定こども園		幼稚園		小学校		中学校		高等学校		特別支援学校	
		正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他
人文 社会	日本							6	6		2		
	国際キャリア								2				
	社会							2	8	1			
	人間福祉												
教育	教育	28	1	4		50	42	4	13		2	5	1
看護	看護												

2 特色

四天王寺大学は聖徳太子が敬田院を設立された精神、すなわち宗教的情操教育によって人格の陶冶を図り、広範にして深い知識と高い技術・技能を教授することによって人格の形成に資することを目的として、開学以来、社会に有為な人材の育成に努めている。したがって、教員養成に対する理念は、この「建学の精神」に基づいて、地域社会の学術・教育・文化・福祉などの振興と発展に寄与することである。これに基づいて、本学は、教員に求められる基本的な資質能力を

養い、近年の急激に変化・発展する社会の中で、教員として直面する新たな教育課題に対処できる資質・能力を有する教員を養成することを目標としている。

また、上記目標を達成するための計画として、いずれの免許状取得においても、本学の「建学の精神」である宗教的情操教育と人権に関する教育を行い、人格の陶冶を図る基礎教育科目の学修が必要となる。この学修により、「和の精神」を体得し、子どもたちの生命と心を護り、愛情をもって教育できる人間性豊かな教師の育成を目指している。

Ⅱ 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1－1 教職課程教育の目的・目標を共有

〔現状〕

本学では建学の精神に基づき、知識・技能のみならず、豊かな人間性と倫理観を備えた教員の養成を目的としている。教職課程教育の目的・目標は、「卒業認定・学位授与の方針」及び「教育課程編成・実施の方針」を踏まえて設定しており、「教員養成の目標及びめざす教員像」として履修要覧及び本学公式ホームページに明示し、学生及び教職員に周知している。また、学科会議、教授会、教務委員会、教員養成カリキュラム委員会等の会議体において教員養成の目標を共有し、教育内容・教育方法の検討を行うことで、教職課程教育の質の向上を図っている。さらに、履修カルテ等を活用し、学生の学修成果の把握と可視化を図っている。加えて、教職教育推進センターを中心に、各学科に配置した教職支援委員との連携体制を整備するとともに、教職支援委員会を定期的を開催し、取組状況の共有や課題の検討を行うことで、教職課程の質保証および継続的な改善に取り組んでいる。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職課程教育の目的・目標および育成を目指す教師像を各学年の学期開始前オリエンテーションや関連授業で繰り返し説明し、周知を図っている。

教育学科では、入学時から学校現場での体験的学修を重視する『『教師力』養成システム』を通じて、教職員及び学生に周知している。さらに、履修要覧、履修系統図、シラバス、ガイダンス等により目標を共有し、学年別説明会や個別面談を通じて継続的に確認している。

看護学科では、1 年次配当科目の「大学基礎演習」で、教職課程についての説明の中で専任教員が育成を目指す養護教諭像やカリキュラム全体を説明し、学科専門教育科目内でも周知を行っている。教職員間ではコース選考会等で目的・目標を共有している。

〔優れた取組〕

教職課程教育の目的・目標を達成するため、建学の精神に基づく宗教的情操教育及び人権教育を基盤とした基礎教育科目を履修し、人格形成の基礎を培う教育を行っている。そのうえで、教員として必要な幅広い教養や科学的な観察力・判断力、国際的視野を養う共通教育科目を履修し、さらに学科専門教育科目の体系的な履修を通して、各学校種・教科の教員に求められる高度な学識と豊かな知識を養っている。(令和 7 年度以降入学生からは基礎教育科目と共通教育科目を合わせて教養教育科目としている)。また、教職教育推進センターを中心として各学科と連携し、教職課程に関する情報共有や学生支援を行う体制を整備している。各学科に配置した教職支援委員を通じて情報を共有するとともに、教授会、学科会議等の機会を活用して教職課程に関する理解を深め、教育内容・教育方法を検討し、組織的な教員養成の推進に取り組んでいる。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職課程の目的・目標に向けたロードマップを学生に公開し、履修計画等の見通しを高めている。また、学科教員間でロードマップを共有し、教職課程教育の計画的実施のために活用している。

教育学科では、アセスメント・ポリシーに基づき、DP 達成度評価を実施し、学修成果の可視化と検証を行っている。令和 7 年度実施公立学校教員採用試験では 127 名（実数 92 名）が現役合格し、第一志望自治体合格率 94.6%を達成するなど、教育成果が具体的数値として表れている。加えて、公立幼稚園教諭・保

育教諭・保育士採用試験では 24 名が現役合格を果たした。これらの結果は、教職課程の目的と成果が整合していることを示している。

看護学科では、1 年次から専任教員が学生に教職課程の目的・目標を説明するとともに、同一の教員が複数科目を通じて継続的に周知している。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程教育を通して育成する学修成果については、カリキュラム全体との関係を踏まえながら、より具体的に整理し、その可視化を一層進めていく必要がある。特に、教職課程教育に焦点を当てた到達目標と評価方法との対応関係を明確化し、学生が自身の成長や到達度を把握できる仕組みの整備が求められる。今後は、履修カルテ等を活用しながら学修成果の把握を進めるとともに、教職支援委員会や教員養成カリキュラム委員会等において検討を行い、教職課程教育の改善につなげていく。

社会学科では、当該学科だからこそ育まれる学修成果とは何かを具体的に検討することが必要である。

教育学科では、DP 達成度評価結果と教員採用試験結果との関連について整理を行い、その結果を教職支援委員会および教員養成カリキュラム委員会で共有し、必要に応じて指導内容や支援体制の改善に活用する。また、実習校や卒業生の意見も参考にしながら、教育目標の達成状況を点検していく。

看護学科では、学生及び教職員への周知や目的・目標の共有は個別の機会に依存しており、体系的・計画的とは言い難い状況にある。今後は、学科全体として教職課程についての共通理解を図る仕組みの明確化と、履修カルテと学位授与方針との対応関係を整理し、学修成果の可視化を一層充実させる必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

- ・ 資料 1－1－1：

令和 7 年度履修要覧

【<https://www.shitennoji.ac.jp/student/rishuyoran/>】

- ・ 資料 1－1－2：

四天王寺大学公式ホームページ（教員養成の質の向上に係る取り組み）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/about/disclosure/teacher-training/>】

- ・ 資料 1－1－3：

四天王寺大学公式ホームページ（教員養成の目標とそのための計画）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/about/disclosure/teacher-training/>】

- ・ 資料 1－1－4：

令和 8 年度（令和 7 年度実施）教員採用試験結果速報

【<https://www.shitennoji.ac.jp/news/65228/>】

- ・ 資料 1－1－5：

四天王寺大学公式ホームページ（教育学部教育学科学校教育コース）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/faculty/education/school/>】

- ・ 資料 1－1－6：

四天王寺大学公式ホームページ（教育学部教育学科幼児教育保育コース）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/faculty/education/child/>】

- ・ 資料 1－1－7：

教育学部教育学科履修系統図

【https://www.shitennoji.ac.jp/assets/images/about/disclosure/curriculum-map/curriculum_03.pdf】

・資料 1－1－8：

FD・SD 活動報告書 [令和 6 年度]

【<https://www.shitennoji.ac.jp/assets/images/about/disclosure/fsd/r06fsd.pdf>】

・資料 1－1－9：

令和 6 年度アセスメント・ポリシー評価シート（教育学部）

・資料 1－1－10：

シラバス照会

【<https://unipa.shitennoji.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>】

基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

〔現状〕

本学では教員養成に関わる全学的な委員会組織として、教職課程の運営と質向上を主な目的とする教員養成カリキュラム委員会（委員長：教務部長）と、学生が教育職に就くための活動支援を主な目的とする教職支援委員会（委員長：教職教育推進センター長）を設置している。教員養成カリキュラム委員会は、教職課程を設置する学科の教員、教職に関する科目の担当教員および教務課長で構成されており、教職科目の編成や適切な実施に向け、事務職員と各学科の教職課程担当教員で役割分担をする協働的な体制を構築している。教職支援委員会は、教職課程を設置する学科の教員、教職教育推進センター長で構成されており、教員採用試験に関する学生相談や対策講座を実施するとともに、取組の企画・立案および実施状況の報告を行っている。また、課題の把握を行い、必要な改善策の検討を行っている。各委員会の内容はそれぞれの学科会議等で共有し、全学的な取組を展開している。事務局組織として、教務部では教員免許状取得に向けた履修相談や一括申請業務などを行い、教職教育推進センターでは実習業務や模擬試験の実施、ガイダンスの開催などを行い、キャリアセンターでも教員採用試験に関する支援や求人情報の提供などを行っている。学生への情報提供や支援が円滑かつ多面的に行われるよう、教職支援委員を中心に、各部署職員と学科教員とが密に連携を図れる体制を取っている。このように、教職課程の運営は、全学組織と学科との連携のもと、組織的に推進されている。

日本学科では、教職支援委員を 2 名配置しており、そのうち 1 名は教職教育推進センター副センター長を務め、教職教育推進センターとの連携を深めている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、中学校英語の教員採用試験受験者支援のグループをつくり、教職教育推進センターの組織のも

と学科教員が支援教員として参画し、模擬授業や面接試験対策において教職教育推進センター教員と協働し、学生指導を行っている。

人間福祉学科では、担任教員からの適切な指導や、教職課程教育の質的向上のために、教員間の授業公開により教員が授業改善を図る取組も行っている。

教育学科では、学校現場等での教職経験を有する教員を含む専任教員が学科運営および教職課程教育に参画し、理論と実践の往還に基づく学修活動を体系的に指導する体制を整備している。さらに、ICT アクティブ・ラーニング教室を活用し、タブレット端末や電子黒板等を用いた授業を展開するなど、ICT を活用した教育環境の整備を進めている。

看護学科では、養護教諭養成を担当する専任教員を 1 名配置し、関連科目担当教員、事務職員と連携しながら教員養成を行っている。教育学科の養護教諭養成担当教員や教職教育推進センターとも連絡を密にし、特に教育実習等では全学的体制で対応している。

〔優れた取組〕

日本学科では、教員のうち 2 名は中学校・高等学校の教員経験者であり、そのうち 1 名は管理職経験者である。実務経験者が教育・指導に関わることで、学校現場の実態を踏まえた指導体制を構築している。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職教育推進センターが全学的な支援体制（受験者グループ編成・企画運営等）を担い、学科教員が専門性（英語科教育・授業づくり等）を活かして指導に参画することで、効果的な役割分担を実現している。特に模擬授業・面接対策では、両者が協働して学生の課題に応じた助言・指導を行い、実践力の向上につなげている。

教育学科では、教員養成目標の共有を図るため、教授会における全体共有に加え、学年単位やコース・選修単位での情報共有を行い、実態や課題に応じた教育内容・教育方法の検討を継続している。また、FD・SD 活動を通じて授業評価ア

ンケート結果を授業改善に反映し、教職関連科目の改善事例を共有することで授業改善を図っている。

看護学科では、専任教員を中心に学科内外の教員・全学組織と協働する体制を構築し、実習を含む教職課程運営を円滑に行っている。また、模擬保健室を活用した実践的な授業展開や、授業評価アンケートや公開授業を実施し、委員会による点検・評価を継続的に実施している点も教職課程の質保証に資する取組である。

〔改善の方向性・課題〕

日本学科では、デジタル教科書への対応が課題となっており、授業における活用方法や指導内容の検討を進める必要がある。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、模擬授業・面接対策の指導内容は各教員に任されており、担当変更時の引き継ぎが十分でないことがある。教職教育推進センター教員の交代も発生するため、指導の継続性確保が課題である。

社会学科では、全学組織である教職教育推進センターと学科の教職課程担当者との間での役割分担については適切に行われているが、学科内において、教育内容や教育方法について検討する機会をさらに充実させる必要がある。

人間福祉学科では、教育職員免許法の改正や本学におけるカリキュラムの見直し等に伴い、学生の入学年度によって異なる履修指導の複雑化が課題となっている。

教育学科では、カリキュラムの見直し等に伴い、入学年度によって履修内容や科目構成が異なる場合が生じている。また、在学中に取得希望免許種の変更が生じるケースもあり、履修指導の複雑化への対応が課題となっている。これらに対応するため、教職課程全般に関する手引きや情報共有資料の整理を検討し、学生の多様なニーズに応えられるよう教職員間の連携を強化する。あわせて、教職支

援委員会、教員養成カリキュラム委員会における協議事項の整理を進め、改善内容の共有を図りながら継続的な改善につなげていく。

看護学科では、教職課程教育において、デジタル教科書を活用した指導への対応は、現時点では施設・設備等のハード面の制約から十分とはいえない。また、カリキュラム上の制約により、保健教育に関する指導に充てる時間が限られている点も課題である。今後は、全学的な環境整備の動向を踏まえつつ、授業内容や方法の工夫により教育力向上を図る必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

・資料 1－2－1：

四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部教員養成カリキュラム委員会規程

・資料 1－2－2：

四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部教職支援委員会規程

・資料 1－2－3：

四天王寺大学公式ホームページ（ICT 模擬授業教室、ICT アクティブ・ラーニング教室）【<https://www.shitennoji.ac.jp/about/campusmap/cam03/>】

基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目 2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

〔現状〕

本学では、「卒業認定・学位授与の方針」および「教育課程の編成・実施の方針」を踏まえ、「教員養成の目標及びめざす教員像」を定め、公式ホームページおよび履修要覧等を通じて学内外に公表している。また、各学科の「入学者受入れの方針」に基づき、教職志望の意欲を有する学生の募集および選考を実施している。教職課程の履修にあたっては、ガイダンス等を通じて教職を志す心構えや履修上の留意事項を学生に周知するとともに、履修カルテを活用して学生の自己評価や課題の把握を行い、教職課程における学修の振り返りと今後の学修への動機付けを促している。また、履修カルテは各学年終了時や教育実習の前後などの節目に作成させ、学びの軌跡を確認しながら次の学修段階へとつなげる指導を行っている。これにより、学生の主体的な学びの継続と教職に必要な資質・能力の形成を支援している。

日本学科では、各学期前のガイダンスにおいて、教職における心構え等を繰り返し伝え、学生への周知と確認を行っている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教員免許取得者数および教員就職率向上を目的として、勉強会や実践の場の提供など段階的な教職支援体制を整えている。

人間福祉学科では、履修カルテの入力内容を基にして、学生の適性や資質に応じた教職指導を行っている。

教育学科は、令和 6 年度以降、学校教育コースおよび幼児教育保育コースの 2 コース制を採用し、各コースに入学定員を定め、適切な規模で免許履修学生数を維持している。学校教育コースでは小学校・中学校・高等学校・特別支援学校教員および養護教諭養成を目的としたカリキュラムを編成し、幼児教育保育コースでは幼稚園教諭・保育士養成を柱とした体系的教育を実施している。また、1

年次のハロースクール／ハローナーサリー、2年次のインターンシップ、3年次の教育実習へと段階的に実践機会を配置し、理論と実践を往還する学修を展開している。

看護学科では、1年次配当科目の「大学基礎演習」や3年次のキャリア支援においてガイダンスを実施するとともに、2年次にコース選抜試験を行い、GPAに加えてループリック評価に基づく面接等により、教職課程履修に適した学生を選考している。選抜後は、少人数制の利点を活かし、個別面談や継続的な指導を行っている。その結果、履修学生は全員、単位修得を着実に進め、看護師国家試験および教員免許状を取得している。

〔優れた取組〕

本学では、教職課程を有する各学科、教職教育推進センター、教務部、キャリアセンター等が連携し、教職課程履修学生に対する体系的な支援体制を整備している。教職ガイダンスや教員採用試験対策、教員として活躍する卒業生との交流機会の提供などを通して、学生の教職への意欲向上とキャリア形成を支援している。また、履修カルテを活用して学生の学修状況や教職への適性を継続的に把握するとともに、各学年の節目において振り返りを行わせることで、学生自身がこれまでの学修を整理し、今後の学修目標を明確にする機会を設けている。これらの取組により、学生が主体的に学修を継続し、教職に必要な資質・能力を段階的に形成できるよう支援している。

日本学科では、教員免許取得要件科目に履修要件を設定し、学生の計画的な履修と日々の学修意欲の向上を促すことで、質の高い教員育成に努めている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、**Jump・Start English** プロジェクトにおいて、教科教育法を履修した学生を中心に、高校生を対象とした英文法・英語コミュニケーションの指導を担当させることで、実践的指導力の向上を図っている。また、英語教員志望者を主対象とした正課外の勉強

会を継続実施し、英語力と学修習慣の形成を支援している。

社会学科においては、2 年次冬学期開講の「各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む）」において、学科専門教育科目である「社会科教育研究Ⅰ」の単位修得及び累積 GPA2.5 以上という履修要件を設定している。その結果として、適切な規模の免許履修学生数を維持している。

人間福祉学科では、教員に求められる専門知識のみならず、本学の「建学の精神」である宗教的情操教育と人権や福祉に関する教育を行い、人間性豊かな教師の育成を目指している。

教育学科では、インターンシップや教育実習に加え、学校現場でのボランティア活動を推奨し、段階的なキャリア形成を支援している。そのうえで、学校教育コースでは羽曳野市や消防局と連携した防災教育活動、英語教育分野では海外教育実習や英語論文発表、保健教育分野では高大連携健診補助実習、幼児教育保育コースでは園児招聘型授業を実施するなど、各コースの特色を活かした実践的教育を展開している。

看護学科では、これまで、履修希望者全員が履修を継続していた時期には、学修負担や進路不安を背景に、履修継続が困難となる学生が一定数見られたが、基準に基づく選抜試験を経た体制へ移行したことで、途中で履修を断念する学生は見られなくなった。教職への適性を重視した学生確保が実現するとともに、少人数体制を活かした個別指導により、学生の資質や状況に応じたきめ細かな教職指導が行われ、履修継続および学修成果の向上につながっている。

〔改善の方向性・課題〕

令和 7 年度途中の全学的な学生ポータルサイトのリニューアルに伴い、履修カルテの入力方法等にも変更があり、学生および教員に一定の混乱が生じた。今後は、学生にとって利用しやすい環境を整えるとともに、操作マニュアルの整備や履修カルテの目的・意義に関する丁寧な指導を行う必要がある。

日本学科では、教職課程が卒業要件ではないため、教職志望者は卒業要件外の単位を多く修得する必要がある、負担が大きいことが課題となっている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職志望学生の確保が難しくなりつつある状況を踏まえ、早期から教職の魅力ややりがいを実感できる取組をより充実させる必要がある。また、正課外支援（勉強会等）の参加促進と継続支援の仕組みを整え、学修習慣形成を一層強化することが課題である。

社会学科では、各年度末に履修カルテの記入を指導しているものの、その都度記入している学生の割合は必ずしも高いとは言えない。今後は記入指導を徹底するとともに、授業時間内外で学生との面談の機会を設けるなど、履修カルテをより効果的に活用する方法を検討する必要がある。

人間福祉学科では、教員免許取得のために卒業要件外の単位を多く修得する必要がある、免許取得を断念する学生が見られる。そのため、教職の魅力ややりがいを実感できるような取組を充実させ、履修継続を支援する必要がある。

教育学科では、インターンシップや教育実習を通じて学生の適性や課題が明確になる場合があることから、各部署が連携し、履修カルテを活用して学修状況や成長過程を共有しながら、個々の状況に応じた指導・支援を行う体制の充実が求められている。また、教職志望率や履修継続状況の把握を行い、早期段階からの動機付け支援を強化するとともに、実践機会の教育的効果について整理を進める。

看護学科では学科専門必修科目が多く、入学当初から教職科目を履修しなければならない、途中参入が困難であることから、教職課程志望者数が限定される傾向にある。また、3年次の実習期における履修負担の大きさや動機の低下も履修継続に関する課題となっている。今後は、入学早期や入学前段階でのガイダンスを充実させるとともに、個別相談や動機付け支援を含むフォロー体制の整備が求められる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 2－1－1：

令和 7 年度履修要覧

【<https://www.shitennoji.ac.jp/student/rishuyoran/>】

- ・資料 2－1－2：

四天王寺大学公式ホームページ（教育研究上の目的・3つのポリシー等）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/about/policy/>】

- ・資料 2－1－3：

四天王寺大学公式ホームページ（教員養成の目標及びめざす教員像）

【https://www.shitennoji.ac.jp/assets/images/about/disclosure/teacher-training/teacher_training_plans.pdf】

- ・資料 2－1－4：

入試ガイド 2026

【<https://www.shitennoji.ac.jp/admission/nyushi/list/>】

- ・資料 2－1－5：

2026 年度入学試験要項

【https://www.shitennoji.ac.jp/admission/assets/images/nyushi/docs/guidelines_01.pdf】

- ・資料 2－1－6：

教育学部 3つのポリシー

【https://www.shitennoji.ac.jp/assets/images/about/policy/26_kyoiku_policyR5.pdf】

- ・資料 2－1－7：

教職課程・教育実習等の手引き

- ・資料 2－1－8：

シラバス照会

【<https://unipa.shitennoji.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>】

基準項目 2－2 教職へのキャリア支援

〔現状〕

本学では、教職教育推進センターを中心に、各学科の教職担当教員や関係部署が連携し、教育実習等の運営や教員採用試験対策等を通じて、教員を志望する学生への支援体制を整備している。また、教職進路調査や教員採用試験受験状況調査、各種ガイダンスや講座実施時のアンケート調査を通じて、学生の教職志望度や意欲、ニーズの把握に努めている。これらの結果を踏まえ、希望自治体別の自主勉強会や教員採用試験対策講座、面接指導、模擬授業指導等の内容を改善し、学生の実態に即した支援を実施している。さらに、教職ガイダンスや大学公式ホームページ、学生ポータルサイト等を通じて教員採用試験に関する情報を随時提供するとともに、教職に就いている卒業生を招いた進路ガイダンスや交流の機会を設けることで、学生の教職に対する理解と意識の向上を図っている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、担任制に加え、2年次から3年次にかけて段階的に配置された教科教育関連科目（英語）を通して、授業内で学生の意欲や適性を把握している。さらに、英語教育ゼミナールにおいて面接・模擬授業対策を行い、免許取得および教員就職を支援している。

社会学科では、教職教育推進センターが実施している教職進路調査や3年次生・4年次生への教員採用試験受験状況調査の結果を踏まえ、教職志望度や意欲を把握している。また、演習科目（「大学基礎演習」「基礎演習」等）において担任教員が個別面談を実施し、その中で教職志望学生の志望度や意欲を把握するとともに、教職課程担当教員と情報共有を行っている。

教育学科では、各学年担任によるキャリア支援と教職教育推進センターを中心とした教職支援が両輪となり、教務部および学生支援センターを含めた全学的体制のもとでキャリア支援を展開している。とりわけ3年次以降は、教育実習から教員採用試験に至るまで、教職教育推進センターが中心となり支援を行っている。あわせて、教職教育推進センターとキャリアセンターが連携し、教員採

用試験対策講座、模擬授業指導、面接練習、個別相談等を実施しているほか、各コースにおいても独自の対策講座や勉強会を実施している。

看護学科では、教職免許取得を希望する学生に対しては、個別面談や選抜試験を通じて教職への意欲や適性を把握している。キャリア支援は、学生の進路希望に応じて学科内キャリア委員会、個別面談、教職教育推進センターと連携して実施している。また、実習や講義において養護教諭等の外部講師を招き、教職理解を深める取組を行っている。

〔優れた取組〕

本学では、教職を志望する学生の意欲向上およびキャリア形成を支援するため、教職ガイダンスや卒業生による講話、進路ガイダンス、そして希望自治体別の自主勉強会や教員採用試験対策講座、面接指導、模擬授業指導等の教員採用試験を受験する学生への支援を実施している。教職ガイダンス等の取組を通して、教員採用試験に向けた学修計画や大学生活の見通しを学生が具体的にイメージできる機会を提供している。また、アンケート調査を通じて学生のニーズを把握し、教員採用試験対策講座や学内模擬試験等の内容や実施方法の改善に活かしている。例えば、1・2 年次生を対象とした教職ガイダンスの実施により早期から教員採用試験対策の必要性について学生の理解が深まり、夏期集中講座参加者数が増加（昨年対比 200%）するなどの成果が見られている。さらに、卒業生を招いた進路ガイダンスや報告会を実施することで、教員採用試験対策や教職に就くまでの経験を在學生と共有し、教職志望学生のモチベーション向上につなげている。

日本学科では、1・2 年次生対象に「文学部伝統継承プログラム」の一つとして、当該年度教員採用試験合格者の合格体験談（入学から合格までの大学生活の詳細）および質問会（「プレ教採合格こころえプロジェクト」）を実施し、モチベーションの維持・高揚を図っている。2 年次開講の「日本学インターンシップ演

習」ではインターンシップ先に公立中学校 2 校の他、教育関連施設として公立図書館や民間の教育関係会社を含めることで、教職志望者の多様なニーズに応えている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、3 年次以降の英語教育ゼミナールにおいて面接・模擬授業対策を体系的に実施し、教員就職率の向上につなげている。また、翌春から教職に就く 4 年次生が下級生に向けて学修や進路選択について話す機会を設け、教職を見据えた 4 年間の大学生活の見通しを得られるよう支援している。

社会学科においては、1 年次夏学期「大学基礎演習Ⅰ」の学科合同授業として卒業生の講話の機会を設けており、その中で教職に就いた卒業生にも登壇してもらう機会を設けている。また、2 年次冬学期「基礎演習Ⅱ」の学科合同授業として就職活動を終えた 4 年次生の講話の機会を設けており、その中で教員採用試験合格者にも登壇を依頼し、教員採用試験や試験対策について講話の機会を設けている。

人間福祉学科では、キャリアセンターとも連携し、卒業生の勤務する教育施設や学内の教員からの求人情報を教員間で共有し学生に提供している。

教育学科では、1～2 年次は教職へのキャリア導入期と位置付け、担任教員と教職教育推進センターが定期的に情報を共有し、必要な情報提供と支援を行う体制を整備している。とりわけ 2 年次以降はインターンシップが開始されるため、実習状況の把握やフォローアップを行いながら、教育実習から教員採用試験に至るまで段階的なキャリア支援を実施している。その結果、令和 8 年度教員採用試験では 127 名（実数 92 名）が現役合格し、第一志望自治体合格率は 94.6%であった。公立幼稚園教諭・保育教諭・保育士採用試験においても 24 名が現役合格している。さらに、卒業生による報告会や SA 制度を活用し、在学生へのピア支援体制を整備している。

看護学科では、選抜試験や継続的な面談を通じて、学生の意欲・適性を把握し

たうえで支援を行っている。また、学校現場での課題活動や実習、外部講師の活用により、教職を具体的にイメージできる機会を設けており、教職志望への動機付けにつながっている。

〔改善の方向性・課題〕

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職へのキャリア支援を一層充実させるため、卒業生（現職教員）との連携を継続的に強化する必要がある。これにより、学校現場における働き方ややりがい、直面する困難等について具体的に学べる機会を拡充し、学生が教職に就いた後の姿をより現実的にイメージできるよう支援体制の充実を図ることが求められる。

社会学科では、教職に就いている卒業生や地域の多様な人材等との連携の面でさらなる充実を図る必要がある。教員採用試験対策の面接練習において卒業生に協力を依頼する等の取組も行っているが、教職課程担当教員との個人的なつながりで運用されているため、組織的な運用へと発展させる必要がある。

人間福祉学科では、教職関連求人が限られていることから、希望する学生への進路支援が難しい場合がある。そのため、学生に対して教職関連の求人情報を適切に提供し、進路選択に役立つ支援を継続的に行うことが求められる。

教育学科では、インターンシップや教育実習を通じて教職に就く上での学生の課題が顕在化する場合があることから、学生との情報共有や実習校との連携を一層強化し、学外実習のフォローアップ体制の充実を図る必要がある。学生の意志や適性に応じた丁寧なキャリア支援の在り方について検討を進める。あわせて、3年次以降の教員採用試験対策について体系的な整理を行い、筆記・面接・実技対策を段階的に強化していく。

看護学科では、教職教育推進センターによる情報提供は行われているものの、教職関連の就職状況に関する情報について学生の関心は高いとはいえない。また、教員免許状取得者数が少なく、新卒での教員就職実績がないことから、免許

取得後のキャリア支援の充実が課題である。今後は、教員による積極的な情報発信や卒業後を見据えた支援体制の強化が求められる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 2-2-1 :

「日本学インターンシップ」受け入れ分野・機関一覧（2025 年度予定）

- ・資料 2-2-2 :

2025 年度伝統文化継承プロ

- ・資料 2-2-3 :

教員採用試験受験状況調査、教職進路状況調査

- ・資料 2-2-4 :

四天王寺大学ホームページ（教職教育推進センター キャリアセンター）

【<https://www.shitennoji.ac.jp/career/kyoshoku-center/>】

【<https://www.shitennoji.ac.jp/career/center/>】

- ・資料 2-2-5 :

教職教育推進センターリーフレット

- ・資料 2-2-6 :

令和 8 年度（令和 7 年度実施）教員採用試験結果速報

【<https://www.shitennoji.ac.jp/news/65228/>】

- ・資料 2-2-7 :

夏期集中講座参加者数推移（学年別）

- ・資料 2-2-8 :

「進路ガイダンス」参加者数推移

- ・資料 2-2-9 :

シラバス照会

【<https://unipa.shitennoji.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>】

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

〔現状〕

日本学科および社会学科では、教育実習の参加要件として、本学の建学の精神を学ぶ基礎教育科目「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の修得を必須とすることで、取得希望免許に関する専門知識だけではなく、「和の精神」に基づいた日常の心構えと態度を身につけた人間性豊かな教員の育成を目指している。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、教職課程科目と専門教育科目の学修を関連付けながら、英語の教科教育関連科目を段階的に配置している。ICTの活用やアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を推進し、シラバスにおいて学修内容、評価方法、到達目標を明示している。履修カルテ等の蓄積を踏まえ、教育実習および教職実践演習につなげる指導を行っている。

人間福祉学科では、教科教育法や教育実習の履修要件として、専門知識の強化となる科目の修得に加えて、累積 GPA を活用することにより、基礎学力を高める仕組みを構築している。また、教育実習に向け、模擬授業の実施や相互批評による実践的な授業を行っている。

教育学科では、教員・保育者として必要な専門的知識および実践力、指導力の育成を目指し、学校教育コースと幼児教育保育コースの 2 コースを設置している。学校教育コースでは、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校・高等学校教諭（理科・数学・英語）、中学校教諭（国語・社会）、特別支援学校教諭、養護教諭の免許取得を可能とする専修を設けている。各専修領域においては、履修系統図に基づき、基礎科目から専門教育科目、教育実習へと体系的に学修を展開している。また、ICT 活用科目を配置し、教育データの活用や情報活用能力の育成を図るとともに、模擬授業や協働学習を取り入れ、実践力の向上を目指している。

看護学科では、建学の精神および看護学科の目的を踏まえ、養護教諭養成に特化した教職課程カリキュラムを編成・実施している。専任教員の配置により、教

職関連科目と専門教育科目を関連付けた指導を行うとともに、模擬授業や ICT の活用、アクティブ・ラーニングを取り入れている。教育実習に向けては事前指導やガイダンスを行い、履修カルテは教職実践演習において活用している。

〔優れた取組〕

日本学科では、「教育実習指導」の授業において、実習前にゲストティーチャーとして現職教員を招き、実習の心構え、模擬授業の評価なども取り入れ、入念な事前準備をさせて送り出している。また、長期休暇を利用して、学科教員が現代文・古文・漢文の講座を開き、教科に関する基礎的学力の向上を図っている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、英語教科教育科目を段階的に履修させることで、理論と実践を往還しながら学べる体系を整えている。授業ではグループワークや協働的学修を通じて、課題発見・課題解決の力量育成を図っている。ICT 機器の活用を前提とした授業設計や教材提示等を通して、指導力の育成を進めている。教職実践演習等においては履修カルテを活用し、これまでの学修の蓄積を指導へとつなげている。

社会学科では、教育実習の参加要件を設け、特に GPA 値（累積 GPA2.5 以上）を活用することにより、基礎学力を高める仕組みを構築している。また、教育実習に向け、教科指導法の科目や事前事後指導の科目において、模擬授業の実施や相互批評による実践的な授業を行っている。

人間福祉学科では、取得希望免許における専門知識の強化に加えて、教職課程においても、本学の建学の精神である「和の精神」や専門教育科目である福祉関連科目を学ぶことを通して、人間性豊かな教員の育成に取り組んでいる。

教育学科では、1 年次から学校訪問やハロースクールを実施し、2 年次以降のインターンシップ、教育実習へと連続する 4 年間を見通した実践的学修機会を体系的に設定している。具体的には、1 年次に学校体験として本学園系列小学校での「ハロースクール」を実施し、2 年次には通年で毎週金曜日に配属校において「インターンシップ」を行っている。さらに 3 年次には、原則としてインター

ンシップと同一校で教育実習を実施している。これにより、理論と実践を往還する学修構造を構築している。学校教育コースでは、社会や学校等における子どもの多様なニーズに応えることを目的として「教育・子ども理解教育領域」を設定し、教科横断的な教育の在り方を学修できる科目を配置している。また、英語教育分野では英語論文執筆、保健教育分野では専門ゼミ研究発表等を実施し、各分野の特色を活かした実践的教育活動を展開している。幼児教育保育コースでは、園児との直接的な関わりを通じた招聘保育実践や実習前指導を充実させ、発達段階に応じた理解と保育実践力の育成を図っている。

看護学科では、養護教諭関連科目では、事例検討やグループワーク等を中心とした主体的・対話的で深い学びを実践している。また、専任教員による体系的指導により、教職課程科目と専門教育科目、養護実習、教職実践演習を履修カルテで接続し、学びの蓄積を指導に生かしている。

〔改善の方向性・課題〕

日本学科では、学生への個別指導に十分な時間を確保することが難しく、個別支援の充実に向けた指導体制の検討が課題となっている。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、専門教育科目と教職課程科目の接続を明確化し、学生が学修の見通しを高める観点から、履修系統図等の整備および提示方法の改善を継続して行う必要がある。

社会学科においては、教育実習の参加要件を満たしている学生であっても、実習途中で辞退する事例や、実習先の指導教諭の指導を謙虚に受け入れない事例もみられる。そのため、学業成績を中心にした参加要件の妥当性、実習参加前に配当されている教科の指導法や事前事後指導の科目における効果的な指導方法及び運用方法について学科内で検討することが必要である。

人間福祉学科では、専門教育科目の履修系統図を作成しているものの、教職課程科目との系統性を学生に十分提示できていないため、両者の関連性を明確に示す工夫が求められる。

教育学科では、学校教育コースにおいて、在学中に選修の途中変更を希望する学生が一定数見られることから、学生の状況に応じた履修指導のさらなる充実が求められる。幼児教育保育コースにおいては、実習や専門分野の履修状況を踏まえた個別指導の強化が課題となっている。また、教育学科の教職課程カリキュラムにおいて、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法に関する科目」は設置しているが、各教科教育法や専門教育科目においても ICT 機器を活用したアクティブ・ラーニングや協働的学修を積極的に取り入れる必要がある。あわせて、実習評価と学修成果との関連について整理を行い、その結果を教育内容の改善に活用していくことが求められる。

看護学科では、教職課程カリキュラムの系統性や各科目の学修成果の関連について、学生がより明確に理解できる工夫が必要である。今後は、履修カルテを活用した振り返りの充実や、教育実習と教職実践演習の接続をより意識した指導を行い、教職課程全体の学びの可視化を進めていくことが課題となっている。

<根拠となる資料・データ等>

・資料 3－1－1：

令和 7 年度履修要覧

【<https://www.shitennoji.ac.jp/student/rishuyoran/>】

・資料 3－1－2：

四天王寺大学公式 HP：教育学部

【<https://www.shitennoji.ac.jp/faculty/education/>】

・資料 3－1－3：

シラバス照会

【<https://unipa.shitennoji.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>】

・資料 3－1－4：

「教職実践演習」履修の手引き

基準項目 3－2 実践的指導力育成と地域との連携**〔現状〕**

本学では、教職課程における実践的指導力の育成を目的として、地域の教育委員会や自治体、学校や消防署等との連携を図りながら、学校現場や地域社会と関わる学修機会の充実に努めている。本学の位置する羽曳野市をはじめ近隣自治体・教育委員会と包括協定を含む連携協定を締結し、教育学科を中心に、教職課程を有する学科において、学校インターンシップやボランティア活動、教育実習等を実施している。また、教職教育推進センターが中心となり、教育実習や各種体験活動の調整・支援を行うとともに、地域の学校現場や子どもの実態を踏まえた学修機会を提供している。これらの取組を通して、学生が学校現場や地域社会との関わりの中で教育課題への理解を深め、教員として求められる実践的指導力や専門性を段階的に身に付けることを目指している。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、**Jump-Start English** を通して、取得免許状（英語）に応じた実践的指導力を育成する機会を設けている。本プロジェクトは、入学予定の高校生等を対象に、学科学生が英文法・英文読解・コミュニケーション等の指導を行うものであり、学生が授業実践を行うとともに、担当教員が指導技術の助言や実施時の支援を行う体制を整えている。

社会学科では、カリキュラム上に学外ボランティアやインターンシップの機会を設けてはいないが、学生へのオリエンテーションの機会に、これらの様々な体験活動への参加を推奨している。意欲的な学生の中には、主に母校において放課後のボランティアに参加している者も見られる。

教育学科では、教員志望学生に対し、今日求められる実践的指導力につながる基礎的資質・能力を育成するため、平成 31 年度入学生より学校現場での継続的な学びを可能とする『教師力』養成システムを実施している。

看護学科では、養護教諭養成の特性を踏まえ、模擬保健室を活用した演習や、

高学年におけるシミュレーション演習・ロールプレイを通して実践的指導力の育成を図っている。また、地域の子どもの実態や学校現場の最新事情については、教職関連科目で学ぶ機会を設けている。

〔優れた取組〕

本学では、教職課程における実践的指導力の育成を目的として、学校現場での体験的学修や地域連携活動を積極的に推進している。特に、教育学科を中心に、大学が配属する学校でのインターンシップや教育実習を通じて、継続的に学校現場に関わる学修機会を提供している。また、教職教育推進センターを中心に、地域自治体や教育委員会が実施する教育ボランティア活動や地域教育事業に関する情報発信を行い、学生が学校や地域社会と関わる多様な体験活動へ参加できる環境を整備している。これらの活動を通して、学生は子どもとの関係構築や教員との協働的な学びを経験し、教職課程で学んだ理論を実践へと結び付ける機会を得ている。

日本学科では、毎年 2 月に本学科卒業生が勤務する公立中学校に出向き、実際の授業を見学（質疑応答を含む）する機会を設けている。また、「日本学インターンシップ演習」の演習先である藤井寺市や羽曳野市の中学校に、演習後も引き続き「スクールフレンド」等として継続的に関わることを推奨している。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、**Jump-Start English** において、学生が「教える側」として授業を計画・実施するため、教職課程で学んだ内容を実践へ接続できる点に特色がある。毎回、学科教員が監督者として参加し、学生の指導を支えることで、指導内容の真正性と教育効果を確保している。高校生の反応を踏まえた授業改善を行うことで、体験と振り返りを往還する学びにつながっている。

人間福祉学科では、1 年次からの教育ボランティア活動への参加等、継続した学びを通じ、子どもとの関係構築や教員とのコミュニケーション能力の育成を

している。これらの経験は、教育実習をはじめとする教職科目履修のための学修の充実や、実践的指導力獲得にむけた基礎づくりにもつながっている。

教育学科では、『教師力』養成システム」に基づき、1年次に学校体験として本学園系列小学校での「ハロースクール」を実施し、2年次には通年で毎週金曜日に配属校において「インターンシップ」を行っている。さらに3年次には、原則としてインターンシップと同一校で教育実習を実施している。この継続的な実践構造により、子どもとの関係構築や教員との協働体制が形成された状態で教育実習を開始できることが本システムの特長である。また、防災教育連携事業、高大連携健診補助活動、特別支援学校との協働活動、海外教育実習等、多様な連携活動を展開している。幼児教育保育コースにおいても、園との継続的連携や招聘保育実践等を通じて実践的力の育成を図っている。これら地域課題に即した教育活動を通じて、実践的指導力の育成を推進している。

看護学科では、模擬保健室を活用した演習や実践場面を想定した授業設計により、養護教諭として必要な対応力や判断力を育成している。

〔改善の方向性・課題〕

インターンシップ等の継続的な学校体験活動においては、活動の過程で不安や緊張を感じる学生もあり、途中辞退に至る事例も見られる。そのため、学生が安心して活動に取り組めるよう、教職教育推進センターの担当教員と学科教員、ゼミ担任等が連携し、多面的な支援体制を構築することが必要である。

国際キャリア学科および国際コミュニケーション学科では、Jump-Start Englishに参加した学生が得た指導上の工夫や学びが、次年度以降の学生へ十分に継承されない場合がある。そのため、指導案・教材・振り返り記録等を体系的に蓄積し共有する仕組みを整備し、教育効果の継続的な向上につなげていくことが課題である。

社会学科では、3年次冬学期の教育実習参加までに、学校へのインターンシッ

ブの機会を設けることが望ましいが、専門教育科目や教員免許取得に必要な科目の履修負担も小さくない。そのため、教育実習参加後にならざるを得ないが、教職志望の強い学生に対しては、4年次にインターンシップの機会を設けることができないか等、検討していく必要がある。

人間福祉学科では、教員を目指す学生に対し、取得する教員免許状の特性に応じた実践力および指導力を育成するための強化体制を整えていく必要がある。

教育学科では、『教師力』養成システムについて、卒業生や実習受入校から一定の評価を得ている。学校教育活動に貢献できる人材の育成を本学教育学科の使命と位置付け、インターンシップや教育実習のフォローアップの在り方を検証しながら、本システムのさらなる充実を図る必要がある。また、地域連携活動の成果について整理を進め、教育的意義や到達目標との関連を明確にし、教育内容の改善に活用していく。

看護学科では、養護教諭養成の特性上、教育実習以前に子どもと関わる体験活動の機会が十分とはいえず、学生個人の意識や自主的活動に依存している現状がある。今後は、地域や学校と連携した体験的学習の機会を検討するとともに、実践的指導力育成をより組織的に支援する体制の構築が課題である。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 3－2－1：

「2025 授業見学会要項（玉津中）」

- ・資料 3－2－2：

四天王寺大学公式ホームページ 各学科

【<https://www.shitennoji.ac.jp/faculty/>】

- ・資料 3－2－3：

四天王寺大学履修要覧

【<https://www.shitennoji.ac.jp/student/rishuyoran/>】

- ・資料 3－2－4 :
地域連携・研究推進センター
【<https://www.shitennoji.ac.jp/research/community/>】
- ・資料 3－2－5 :
シラバス照会
【<https://unipa.shitennoji.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>】
- ・資料 3－2－6 :
インターンシップ、教育実習実施体制一覧

Ⅲ．総合評価（全体を通じた自己評価）

本学の教職課程は、聖徳太子の敬田院に由来する建学の精神に基づき、宗教的情操教育および人権教育を基盤とした人格形成を重視しながら、教員として必要な専門的知識・技能と実践的指導力を備えた人材の育成を目的として体系的に運営されている。教員養成の目標およびめざす教員像は、「卒業認定・学位授与の方針」および「教育課程編成・実施の方針」との整合のもとに設定されており、履修要覧や大学公式ホームページ等を通じて学内外に明示されている。また、学科会議、教授会、教員養成カリキュラム委員会、教職支援委員会、教務委員会等の会議体を通じて教職員間で共有され、教職課程教育の質向上に向けた組織的な取組を継続的に行っている。

教職課程の運営においては、教職教育推進センターを中心に、学部・学科、教務部、キャリアセンター等の関係部署が連携し、履修指導、教育実習、教員採用試験対策などを一体的に支援する体制が整備されている。履修カルテの活用を通して学生の学修状況や成長過程を継続的に把握し、教職への動機付けや自己省察を促す仕組みを構築している。また、教育学部を中心として、学校訪問、インターンシップ、教育実習へと段階的に配置された実践的学修機会をカリキュラム等に盛り込むことにより、理論と実践を往還する教育が体系的に展開できている。さらに、希望自治体の自主勉強会や教員採用試験対策講座、模擬授業指導、面接対策、卒業生との交流機会の提供など、教職へのキャリア形成を支援する取組も実施している。

以上により、教育学部を中心とした教員採用試験での合格実績にも示されるように、本学の教職課程教育は着実に成果を挙げている。

一方で、教職課程を通して育成する学修成果の整理およびその可視化については、カリキュラム全体との関係を踏まえながら、より体系的に検討する余地がある。また、履修カルテの活用方法や教職支援体制の連携強化、地域や卒業生との連携の拡充などについても、改善のための継続的な取り組みが必要である。

今後は、教職支援委員会および教員養成カリキュラム委員会を中心に自己点検・評価を継続的に実施し、その結果を教育内容や支援体制の改善に反映させることで、社会の変化や学校現場の課題に対応できる教員養成の質保証を図るとともに、教職課程教育のさらなる充実に取り組んでいく。

IV 「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス

令和 7 年 6 月 教職教育推進センターおよび教務部にて打合せを行い、「令和 7 年度教職課程自己点検・評価報告書」の作成プロセスを確認した。

令和 7 年 7 月 教員養成カリキュラム委員会を開催し、令和 7 年度教職課程自己点検・評価報告書」の作成プロセス等の確認を行い、審議の結果、承認された。

令和 7 年 12 月 教職教育推進センター及び教務部より教職課程を有する各学科に「令和 7 年度教職課程自己点検・評価報告書」の作成依頼を行い、報告書（案）の作成を開始した。

令和 8 年 3 月 各学科からの報告書を教職教育推進センター及び教務部で集約・編集した後、学長へ大学としての全体評価の作成依頼を行い、報告書（案）を作成した。

その後、教員養成カリキュラム委員会にて報告書（案）を審議し、意見の反映を行ったうえで、「令和 7 年度自己点検・評価報告書」（案）の完成とした。

令和 8 年 6 月 全学的な審議機関である教育研究評議会において審議し、承認を得たうえで、本学ホームページにおいて公表した。